

紹介

○楠木合戦注文

尊經閣叢刊

大正十二年の關東大震災には諸名家の珍什の烏有に歸したものが多く、天壤の間また求むべからざるに至つた。前田侯爵いたく之を慨き同家文庫尊經閣に襲藏さるゝ秘笈珍籍を不朽に傳へんがために、其の影模を作りて各所に配置するに在りとして、資を捐て育徳財團を設け、漸次その秘籍を複製贈頒して居られる。それを尊經閣叢刊と名づけ、學界の享ける裨益蓋し鮮少たらざるものがある。言ふまでもなく加賀藩第三代の主利常卿いたく古名人の筆迹を愛し之を收蒐せらるゝ事多く、第四代光高卿第五代綱紀卿また大に力を書籍の聚蒐に須る就中松雲公綱紀の如きは佚書秘籍の蓄藏に心を傾けられたから、其の文庫の藏する所、實に他に比類少き名什寶帙に満ちて居る。

いま昭和丙子歳の叢刊の一として複製された本書は其の隨一であつて、詳しくは「楠木合戦注文」と「博多日記」の二部より成り、従前之を正慶亂離志と總稱したものである。元弘三年正月赤坂千劍破城に襲來せる北條氏大軍の交名を掲げ、之についで關東の事書を載せる。其中に大塔官を弑し奉つたものには、近江國麻生庄を、正成を殺したるものには丹波國船井庄を賞として與へる事を

約したものが見える。それから北條軍と正成の城兵との合戦が記され二月二十八日まで賊軍の死傷千八百名に餘つた事を記して居り、城兵好守の程が偲ばれる。千劍破城では山上より石礮を投じて敵を惱した事が見えるが、閏二月一日赤坂本城の陥落までを記し正慶二年閏二月二日の手書である。

以上が本卷の上半で、これまでが正しく楠木合戦注文と稱すべき部分であり、以下の後半は、博多日記と名附けられた部分である。

元弘三年三月十一日肥後菊池武時博多に着した事から筆を起し、肥前の江串三郎入道が土佐を脱し給うた尊良親王を奉じた事、二十三日には賊軍の大友貞宗が天皇の勅書を奉じて下向した八幡彌四郎宗安を斬つた悪虐、二十四日勤王方の高津道性が博多を攻めんとする風聞等、九州、中國、四國方面の動靜を詳記し四月七日前半までで後半以後を缺く。

其の記す所が大體北條方の見聞であるから他に見られぬ點もあるし、太平記以下の記録を裏書する所も多く、何よりも其の時代の人が見聞を記したものである事が、何と言つても貴重な史料である。

筆者は良覺なる僧徒であるが、恐らく東福寺の住僧であらう。と思はるゝ事は、この合戦記すべてが、東福寺領肥後國彼杵庄の重書目録の紙背に記されたものであり、この目録は嘉曆四年七月長覺の書寫したものであるが、合戦記の方また同一筆蹟であるからである。但し合戦記と博多日記とは同筆ながら多少筆蹟の時日

を異にする。

ともかくも、此如き根本史料に容易に接する事が出来た事の吾人の喜悅は言ふを要しないであらうし、紙背の彼岸庄文書また莊園研究の重要な史料たり得る。

育徳財團當事者の努力と好意に多大の敬意を表する。(中村)

○先聖先賢聖道一報養

——國民精神文化文獻六——

本書は彼の元寇の國難の秋に當り、敵國降伏の事を神佛に祈願して愛國の熱情を披瀝した、宏覺禪師東叡壽安の著書であつて、卷子本上下二巻を一冊にまとめ、新しく國民精神文化研究所より國民精神文化文獻第六として世に出されたもの、原本は洛北正傳寺の所蔵にかゝり、現在恩賜京都博物館に寄託せられてゐるのである。

本書の内容は、王法、國家、道德等に關する先聖先賢を問答體に於て説いた一種の教訓書ともいふべきもので、文永十年壽安が彼の弟子圓瓊に與へたものであるが、實に愛國僧壽安の思想を體系的に窺ひ得る唯一の著書とも云ふべく、且對外關係の緊迫によつて、著しく國家意識の高揚せる、當時の國民思想の研究上、缺くべからざる貴重な資料であらう。(東京・國民精神文化研究所發行、菊判仕立和裝、四一頁、定價壹圓貳拾錢)

○近世政治史

吉村 宮 男 著

紹 介

——新日本史叢書第一回配本——

凡そ一國の社會的不安が國民の意識に登り國家的危期が叫ばれる様になるとあらゆる學問——特に解釋の學問としての文化科學の領域に於ては、明快にして鋭敏なるものが要求せられて、學問は速に立場の分裂を始める。我國に於ても近年非常時日本の聲が放たれて以來、國民の歴史は様々の立場に於て批判せられ、歴史に於ける多くの學派は、それらに、自己の黨派の目的意識を以つて次の時代への強力なる指導性を誇示せんとしてゐる。國史の學問は正に情熱の俘となり終らんとしてゐるのである。かかる學問的危期に當つて真に我々の思向すべき途は、無限に純粹なる立場への欲求に於て書かれたる力強い歴史、エネルギーを有する歴史でなければならぬであらう。まことに歴史學は私的なる感情と信念を越えて理性的なる立場に立つ事により、他面に於てはまた深き學問的理解によつて速に詩と文學から自己を分離せしむべきである。

此の秋に當つて西岡虔之助氏を中心とする「新日本史叢書」二十五巻が「アカデミー」の教養を充分に自己のものとして、その上に新たな領域を開拓しやうとする所の「東京帝國大學文學部出身の若き良心的史學者」達によつて世に問はれんとしてゐる事は眞に興味多き事柄である。その企圖する所は「倭敵なる史實の認識に基づく學問的純潔さ、とらはれる所なき批判によつてなる清新にして強靱なる敘述」の中に「日本歴史の新しい體系」を展開せしめんとするものであつて、我々は先づ本叢書の「翹望」が學問的